**佐藤　男郎花 （さとう・だんろうか）**

**１、プロフィール**

俳人。39歳頃、句作を開始し、加藤楸邨主宰の「寒雷」に投句、誌友を経て準同人。県内では「寂光」に拠り、各新聞社の選者を務める。昭和53年現代俳句協会会員に推される。

＜生没＞

1908（明治41）年６月１日～1978（昭和53）年11月26日

＜代表作＞

『句集 男郎花』

小でまりや正しと信じつつかなし

目ざむれば野分病室かけゆけり

＜青森との関わり＞

青森市長島に生まれる。県内と樺太で新聞記者の後、樺太庁職業紹介所。戦後、県内職業安定所長を歴任、退職。

**２、作家解説**

本名、末蔵。明治41（1908）年６月１日、米穀商の佐藤喜作、はやの７男として、青森市長島83番地に生まれた。同じ俳人、齋藤日出於は甥（姉の子）に当たる。

長島小学校を経て、大正11（1922）年４月、県立青森中学校へ進学。昭和２年３月卒業して、４月から三戸郡階上村登切小学校に代用教員として、１年余り教員生活を送った。

昭和３年10月、弘前新聞社青森支局で新聞記者となり、以降４年８月から東京日日新聞社青森支局、10年同社豊原支局長（旧樺太）。14年２月、記者生活を辞職して、樺太庁職業紹介所職業官補として公職に就き、以降戦後は、昭和42年の退職まで一貫して青森県内の職業安定所に勤務した。

昭和12年５月、境井とめ（明治44年生まれ）と結婚、のち２男３女を設ける。

太平洋戦争後、ソ連占領下で抑留生活。昭和22年４月、樺太から青森市に引揚げた。昭和22年８月、八戸公共職業安定所三戸出張所に勤務し、俳句と出会う。八戸職業安定所の俳句グループでの句作から、加藤楸邨主宰「寒雷」に投句し始める。

24年12月、青森公共職業安定所に移る。この頃、高松玉麗を知る。26年、「寂光」同人となる。

28年４月、三沢公共職業安定所長となり、32年８月、弘前同所長。35年野辺地同所長。34年「寒雷」誌友。36年、次女静子を喪う。「（静子急死）吸入器呼吸止みてなほ寒き音」。

36年から39年７月にかけ、「寂光」40周年記念、青森県歳時記句集の刊行に尽力。

40年、「寒雷」準同人。42年、定年退職。53年、現代俳句協会会員に推される。

昭和53年11月26日、没。享年70歳。54年『句集 男郎花』がすぐり会によって発行。12月、青森県文化振興会議から、俳句部門での貢献に対し、感謝状が贈られた。

**３、資料紹介**

〇『句集 男郎花』

図書

1979（昭和54）年11月10日

男郎花の遺句集。とめ夫人の意向を受け、「すぐり句会」同人によって発行された。寒雷入選句全604句を上梓したものである。題簽を加藤楸邨、序文工藤汀翠、その他に高松玉麗と下田螢幻子の文章を所収する。なお男郎花は生前は句集刊行を固辞し続けたという。